# 夢幻の望むモノ

或羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夢幻の望むモノ

【Ｎコード】
Ｎ３２０２Ｚ

【作者名】
或羅

【あらすじ】
――ｉｆの世界。彼が体験し、経験し、そして我々がもしかしたら陥るかもしれない異世界の話。彼はそこで何を見て、何を思い、そして何を得て、何を失うのだろうか――

# 第1話

「ったく、何だってんだよ」
彼は歩く。その先に見える光を目指して。途中、歩き慣れぬ山道の所為で何度も転びそうになりながらも、伸び放題に伸びている草木の所為で剥き出しの手や頬に傷を作りながらも、諦めずに歩く。枝を潜り、倒木を乗り越え、そして遂に光の向こう側に辿り着く。
そこは、目に見えるモノ全てが自然に覆われた大自然――――。
最早地球では滅多に見られることの無くなった世界がそこには在った。
そんな誰もが息を吐きたくなるような自然の芸術を前にして、彼は思いっきり息を吸い、叫んだ。

「ここは、何処なんだ――――――――ッ！？」

バサバサバサ――ッ
彼が叫んだ所為で近くの見たことも無い鳥たちが一斉に飛び立った。
更に、グルルッと獣達の唸り声と殺意が彼を襲う。彼は体を強張らせながら、何故こうなったのかを思い出していた。

＊

朝、目が覚めたときは変わったことなんて無かった。
これまでと同じように目覚ましに起こされ、朝食を食い、学校に出かけた。途中で親友の赤羽幸助（あかばねこうすけ）と出会い、一緒に学校に向かったがそれ以外は変わったことなんて無かったハズだ。
学校ではいつものように授業を受け、友人達と昼食を食べ、放課後

は部活には入っていないので真っ直ぐに家に向かって帰ろうと門を出た。朝と同じように親友と一緒だったので、今日の授業がどうとか、付き合ってる彼女がとか、他愛も無い会話をしながら歩いていたら、突然世界から音が消えた。辺りを見回すと、全ての動きが止まっていた。さっきまで会話をしていた親友も、道路を走っていた自動車も、転びそうになっている子供も、その子供に向かって手を伸ばしている母親らしき女性も、皆止まっていた。

最初は夢かと思った。でも理由は分からないが違うと思った。そして夢ではないのなら何なのか考えた。考えて考えて考えて、そして答えが出る前に唐突に本能が警報を鳴らした。

――この世界が滅ぶ、と。

何じゃそりゃ、と思った。しかし次の瞬間、空が罅割れた。人が音も無く崩れ去った。周りの建物が音も無く倒壊し始めた。そして、空の破片が降って来た。

ふと顔を上げると空の罅から真っ黒な空間が見えた。

ソレを見た瞬間、本能が、理性が、存在が、意識が、己を構成している全てが今起きている現象を理解した。理解してしまった。

世界の崩壊を理解したが故に世界の崩壊を納得せず、世界の崩壊を納得しないが故に余計に世界の崩壊を理解する。

最早、どうしようも無かった。これまで生きてきた１６年間、何の異常にも関わらず、ただ平々凡々に過ごしてきた彼――――夢野幻星（ゆめのげんせい）には世界の崩壊を止める術は持ち得るはずもなく。いよいよ死ぬときが来たか、と諦めの極致に達していると、突然目の前に発生した黒い渦に巻き込まれた。

え、と反応する暇も無く巻き込まれた幻星はまたしても反応する暇も無く黒い渦から吐き出された。ウギャッ、と情けない声を上げて顔からの着地を決めた幻星は、イテテ、と顔を抑えながら立ち上がり、ふと周りを見渡して凍りついた。

――辺り一面、見たことの無い植物でいっぱいだったのだから。

これが常時なら世紀の大発見だが、残念ながら今は非常時だし何よ

り彼の世界は崩壊してしまったと幻星は理解している。
と、そこで幻星は己の思考のおかしさに気が付いた。
「（何故、俺は生きている？世界が崩壊したのなら一生物である俺が生き残れるわけが無い。いや、そもそもここはどこだ？この見たこともない植物は何なんだ――――ッ）」
脳内で思い切り叫んだ後、ふとここに来る直前まで親友と話していた内容の中から『異世界』という単語を思い出した。
『異世界』について真剣に考え込む自分に気が付いて、何を馬鹿なことを、と考える反面、これが真実だ、と悟っている自分がいる。
そう、悟っているのだ。ならば否定する必要はなし、と思い、辺りを見渡したときに見えた光に向かい歩き出した。
そして話は冒頭へと戻る。

＊

「（チッ、マジで何処なんだよここ。クソッ、そんなことに構ってる場合じゃねぇ。相手は獣・・・それも恐らく狼のような集団で狩りをするやつだ。数は多分４匹。大丈夫、勝てない相手じゃない。）」
幻星がそんなことを考えている間にも獣達はゆっくりと距離を詰めてくる。獣達にとっての必殺の間合いまで。その間、幻星はこれまで感じたことの無い本物の殺意に襲われ、しかしそれに緊張するでもなく全くの自然体でその殺意を受け流していた。
そして、必殺の間合いに入ることが出来たのか、獣達は一斉に幻星に向かって襲い掛かった。

獣――姿形としては狼のソレに近い。瞳の色と体毛は黒で体長は目測で約1．5メートルほど。――達は幻星の四方から時間差をつけて襲い掛かった。
最初に幻星の元に辿り着いたのは幻星から見て右から襲い掛かった獣。爪で幻星を切り裂こうとしてくるが、幻星はひらりと避け、逆に前蹴りを食らわした。
「キャンッ」
蹴りを食らった獣はその勢いのまま木に激突し、しばらく痙攣した後動かなくなった。
次に辿り着いたのは後ろから襲い掛かった獣だ。牙で幻星に噛み付こうと口を伸ばしてくるが、牙が届く前に下から蹴りで顎を打ち抜く。
「キャウンッ」
獣は少し空に浮いた後地に倒れる。首が変な方向に曲がっており、痙攣した後動かなくなった。
次は二匹同時に襲い掛かって来た。両方爪で切り裂こうとしており、一匹目よりも殺意が増していた。どうやら仲間をやられたのがわかったらしい。しかしそれでも幻星は慌てずに片方を蹴り飛ばしてもう片方に当て、そのまま追撃で蹴りを入れて吹き飛ばす。
吹き飛ばされた二匹は岩に激突し、そのまま動かなくなった。

「・・・・・・」
幻星は動かなくなった獣達の前に立っていた。そして、さっきの戦闘中の自分に対して疑問を抱いていた。
「（生き物を殺したってのに何にも思わない、か。しかもこれまで武を嗜んですらいなかった俺がやつらの姿を見る前に特性と数が分かり、尚且つ勝てると確信し更に実際に勝ってしまうとは・・・な）」
先ほどの戦闘では、己の身体能力も向上していることが分かった。これは恐らく異世界に渡ったことが原因だろう、と推測する。が身

体能力以外の異常については違うと自分自身の直感が告げている。この直感については先の戦闘でも信じられることが分かったので恐らく今回も正しいのだろう。故に更に考え、そして出した結論がこの世界の崩壊を理解してしまったときだろう、だった。直感もそうだと告げている。

幻星は己の疑問が晴れてすっきりとした気分になったが、すぐに自分が遭難者（この状況だとそうなるだろう）だということを思い出して憂鬱な気分になるのだった。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3202z/

夢幻の望むモノ

2011年12月11日02時57分発行